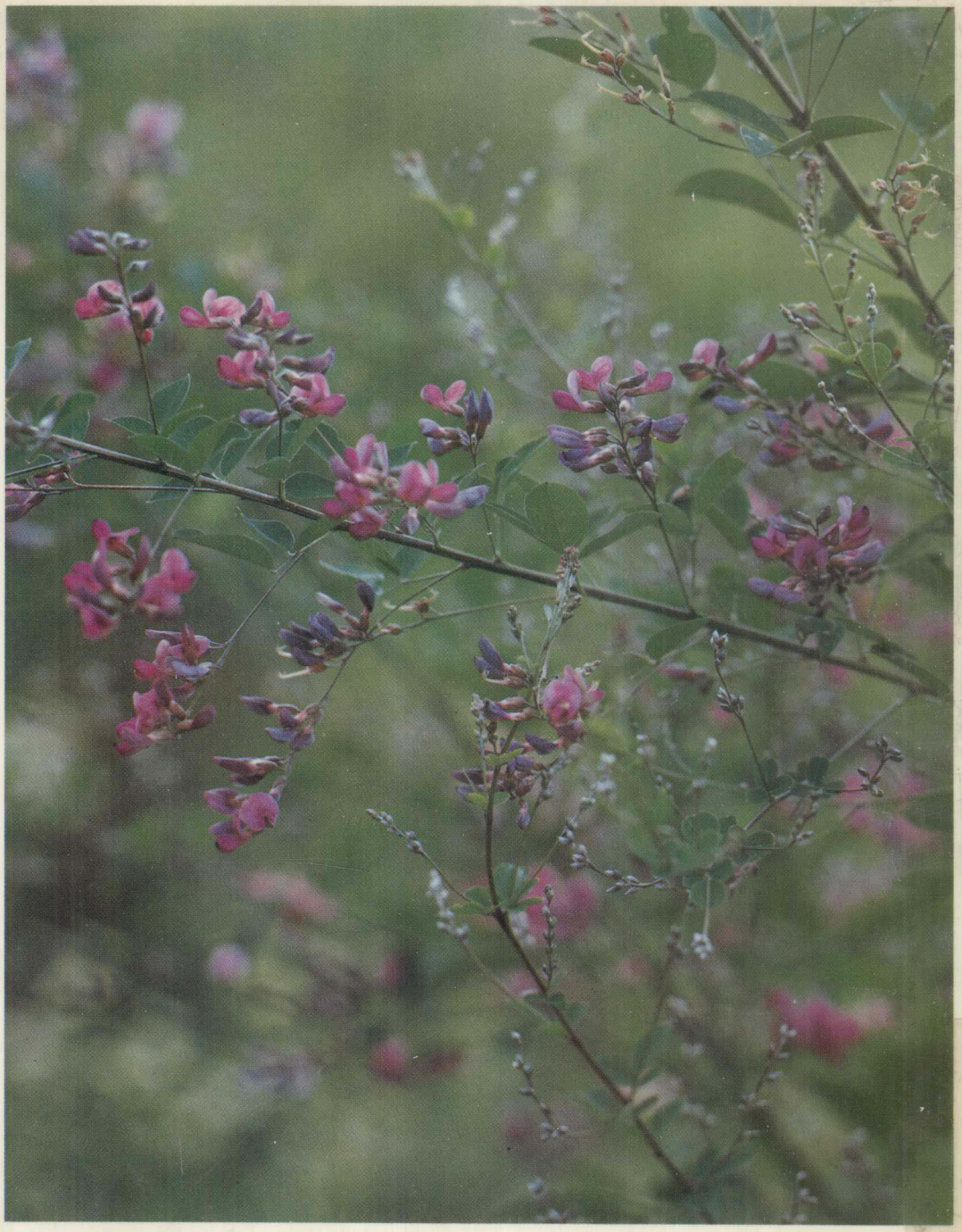
季寄せ―草木花

秋〔上〕

選・監修　加藤楸邨
写　真　冨成忠夫
解　説　本田正次



0392－258041－0042

季寄せ——草木花〔秋・上〕

朝日新聞社編

定価　一八〇〇円

発行　昭和五十四年十月一日第一刷
昭和五十四年十一月三十日第五刷

発行者　朝日新聞社　波多野公介

発行所　東京　名古屋　大阪　北九州　朝日新聞社

印刷所　凸版印刷株式会社

©朝日新聞社一九七九

季寄せ―草木花

選・監修　加藤楸邨／写真　冨成忠夫／解説　本田正次

朝日新聞社

選・監修　加藤楸邨
写　真　冨成忠夫
解　説　本田正次
植物画　佐藤達夫
例句選　加藤知世子
装　幀　多川精一
レイアウト
題　字　川口芝香

春〔上〕

春〔下〕

夏〔上〕

夏〔下〕

秋〔上〕

秋〔下〕

冬

お読みになる前に

●このシリーズは、七巻（秋上・下・冬・春上・下・夏上・下）で構成しており、この巻は秋の上です。

●秋は立秋（八月八日ごろ）から立冬（十一月六日ごろ）まで。季節のわけ方は従来の歳時記に準拠し、開花の時期などが大幅に違うものは解説にそれを説明しました。

●季語は草、木、花に限定しましたが、一部なじみの深い菌、藻も植物季語として含まれています。

●季語の配列は、東京を中心に花や実を見るのが早い順とし、たとえば一秋中咲いている花などはその咲き始めの時期をとり、本田先生に配列していただきました。

●季語は俳句でよく知られているものを主見出しとし、別名、異名、方言名、古名などを併記しました。見出し季語の右側に現代仮名、左側に旧仮名をつけ、別名などは現代仮名に統一しました。

●例句は原作通りとし、仮名づかいは原作に従いました。漢字は原則として新字体とし、新字体のないものは旧字体にしました。

●例句のルビは、原作についているものはそのまま生かしました。読みやすくするために編集部でつけたものもあります。

●解説は植物の標準和名に統一しました。季語と植物解説との見出しが一致しないのは、解説は正しい植物名で、季語は俳句でよく使用されている呼び名を優先的に採用したためです。

●植物名の漢字は論議の多いところですが、できるだけ漢字で表記し、従来よく使用されているものの、明らかに間違っているものは除外しました。

●例句は季語にふさわしい句を収集、選句したものをもとに、各巻の監修選者がさらに編集に合わせて選びました。

●例句は古典は名（号）だけ、現代俳句は姓名とし、配列は、原則として古典を先にしましたが、必ずしも年代順ではありません。

●季語索引には秋上と秋下とを合わせ秋全体の季語をのせました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

秋草／9
秋の七草／11
葛の花／12
撫子／13
萩／15
女郎花／16
藤袴／17
沢桔梗／18
桔梗／19
朝顔／20
車前／21
カンナ／23
隠元豆／23
唐辛／24
茗荷の花／25
千屈菜／27
夜顔／27
郁子／28
藪虱／29
槲の花／31
小車／31
鶏頭花／32
葉鶏頭／33
赤のまま／35
鶯花／35
煙草の花／36
男郎花／37
サルビア／39
朝霧草／39
弁慶草／40
富士薊／40
芙蓉／42
鬱金の花／43
茜／44
鳳仙花／44
臭木／46
蘭／48
木槿／50
美男葛／51
大毛蓼／53
白粉花／53
蕎麦の花／55
藪からし／56
露草／57
秋海棠／59
田村草／59
稲／61
曼珠沙華／62
数珠玉／64
雄ひじわ／65
芒／67
荻／68
狗尾草／69
山薊／70
大文字草／71
棗の実／72
山椒の実／73
松虫草／75
糸瓜／76
鬼灯／77
桐の実／78
牛膝／80
零餘子／81
蔦／82
烏瓜／83
薄紅葉／84
初紅葉／87
釣舟草／87
杜鵑草／88
思草／89
コスモス／90
鳥兜／92
紫苑／93
木犀の花／95
野葡萄／96
山葡萄／96

衝羽根／98
蓼の花／99
藍の花／100
水引の花／101
石榴／102
溝蕎麦／103
菓耳／105
稀薄／105
芦の花／106
龍膽／108
西瓜／109
桐一葉／109
生姜／109
芭蕉／110
刀豆／110
めはじき／110
桃／111
冬瓜／111
青蜜柑／111
青瓢／112
芋／112
長薯／112
自然薯／113
忍草／113
梨／113
葡萄／114
蔓薭／114
秋茄子／114
南瓜／115
種瓢／115
荔枝／115
芋茎／116
間引菜／116
紫蘇の実／116
花前線＝ヒガンバナ——大後美保／6
鶏頭花——佐藤達夫・画／117
花中往来——加藤楸邨／118
季語——自然がつくりあげた生活の詩——外山滋比古／123
季寄せ——わずかな例による感想——杉本秀太郎／128
植物語源考①　学名について——本田正次／133
索引／138
編集ノート／143

目次カット・小原雅子

花前線

ヒガンバナ

開花図でわかるように関東以西の多くの地方では、彼岸のころが盛花期となるので、彼岸花と呼ばれ、曼珠沙華ともいう。北の地方から咲き始め、開花前線の南下は速く、わずか一カ月たらずで東北から九州へとかけ抜ける。葉が枯れた後に三十から五十センチくらいの長い花茎が地上に直立し、その先に大型の赤い花をつける。美しい花だが、墓地や陰湿なところに多く見られ、鱗茎にアルカロイドが含まれていて、どこか毒気を感じる花なので以前は好感がもたれなかった。しかし、最近は観賞用として見直されている。ヒガンバナの開花前線の南下は本格的な秋の南下を意味し、ヒガンバナが咲けば気候が涼しくなる。一九七八年は秋の訪れが遅く、東京付近で盛花期が十日以上も遅れた。

秋草（あきくさ）

秋の草　色草（いろぐさ）　千草（ちぐさ）　八千草（やちぐさ）

秋の草まったく濡れぬ山の雨　飯田蛇笏

秋草一茎少しもつれて轍の中　中村草田男

窯出しの日は秋草も輝かむ　鈴木真砂女

秋草のみだれに人をかばひつつ　中村汀女

秋草の辺に何思ふかがまりて　志摩芳次郎

秋草とわれとのみなり風の中　成瀬桜桃子

秋草もひとの面輪もうちそよぎ　木下夕爾

秋草に礎石十二ありみなひかる（毛越寺）　加藤楸邨

〔秋草〕

『万葉集』にある山上憶良の「秋の七草」を含めた秋のもろもろの草の総称で、あえて花壇に栽培する草花、山野に野生する種類を問うところではないだろう。俳句では色草といったり、千草といったりすることもある。憶良の秋の七草の選にもれたものでも、リンドウ、ワレモコウ、イヌタデ、ヨメナ、カルカヤ、ヒガンバナなどはだれでも知っている山野の秋草であるが、庭に植えるアキザクラといわれるコスモスも花壇の秋の花形であろう。またそれほど人に知られず、路傍や野辺や山路などにひっそり咲く秋草も多い。

センブリ、ツルボ、オトコエシ、サクラタデ、キツネノカミソリ、ヤマハッカ、ツリガネニンジン、ヒヨドリバナ、ヤマラッキョウ、ノジギク、リュウノウギク、ノハラアザミ、またアキの字のつくアキノゲシ、アキノキリンソウ、アキギリ、キバナアキギリ、アキノタムラソウ、アキノエノコログサなど数えあげたら際限がない。

俳句の季題では立秋以後は秋になっているので、たとえ八月の残暑きびしい中に咲いていて、実感としては夏草といいたい花でも、俳句ではやはり秋草として取り扱わねばならないという矛盾もある。例えば垣根や鉢植えにするアサガオなどがそうである。またこの逆にオケラの花は山では秋咲いているので秋草といいたいところだが、俳句では夏の季題になっている。

朝顔売りや苗売りも夏の風物詩であり、東京の入谷鬼子母神の朝顔市も七月の初めだから、アサガオはやはり夏草の花であり、秋草ではないだろう。そもそも夏草だ秋草だと、人が勝手にどちらかに決めようとするのが無理かも知れぬ。写真は右ページがススキとアキノキリンソウ。左ページ上がセキヤノアキチョウジ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

秋の七草（あきのななくさ）

七草に刈萱ありと思ひしが　川崎展宏

膝までの秋の七草分けすすむ　鷹羽狩行

門外の秋の七草苑に見ず　瀧春一

七草や家出てすぐに月光浴ぶ　岩田蒼穹子

子の摘める秋の七草茎短か　星野立子

〔秋の七草〕

秋の七草は『万葉集』巻八に山上憶良が秋に咲く野草の花を愛でて詠んだ二首の歌「秋の野に咲きたる花を指折りてかき数ふれば七種の花」「萩が花尾花葛花なでしこの花女郎花また藤袴朝貌の花」に由来している。初めの六種は現在でもそのまま用いられているが、最後の朝貌の花はその当時まだ日本に渡来していなかったという理由で、当時の歌の朝貌は太古から日本の山野に野生しているキキョウだということになり、現在はハギ、ススキ、クズ、ナデシコ、オミナエシ、フジバカマ、キキョウの七種に定めている。しかし、ナデシコ、キキョウ、オミナエシなどのように、ところによっては真夏の暑い時から花を開いている種類もあり、また七草といってもハギやクズのように草でなくて木のこともある。だが、朝貌の花は別として、憶良が選んだ秋の七草の優しさと美しさを素直に受け入れて上代人の風流な心にあやかってもいいのではなかろうか。写真はススキとオミナエシ。

葛（くず）の花

葛　真葛　葛かずら　葛の葉

葛原の風の中にて猫白し　横山白虹

真葛野に晴曇繁し音もなく　金子兜太

わが行けば露とびかかる葛の花　橋本多佳子

高館へ風吹き上ぐる葛の花　加藤知世子

葛咲くやいたるところに切通　下村槐太

〔クズの花〕

全国の山野に我が物顔して野生しているマメ科のつる性多年草であるが、よく生長したものは木になることもある。葉の裏が白く、秋風に吹かれて白くひるがえる風情を詠んだ古歌も多い。裏見を恨みにかけて「うらみくずの葉」などという。初秋のころ、葉のわきから太めの総状花序を立てて蝶形をした紅紫色の花を密につけて開くが、大きな葉に隠れてせっかくの美しい花も見えぬ場合が多い。漢名を葛というが、クズと読んではならぬ。和名のクズは昔大和国の国栖（くす）の人が根から葛粉を作って売り歩いたことからきている。

撫子（なでしこ）

大和撫子（やまとなでしこ）　河原撫子（かわらなでしこ）　常夏（とこなつ）

かさねとは八重撫子の名成（なる）べし　曽良

なでしこに二文が水を浴せけり　一茶

撫子やぬれて小さき墓の膝　中村草田男

撫子や波出直してやや強く　香西照雄

サロマ湖の撫子の咲き乱れたる　高野素十

〔ナデシコ〕

秋の七草の一つだが、盛夏のころからすでに花がある。花はいわゆるピンクで、ピンクを英語の字引で引けばナデシコと書いてあるが、英語だから日本のナデシコとは違う。ナデシコは撫子と書かれるがその可憐な花の様子からきているのだろう。いかにも日本人好みの花で、図案や模様、絵画などに盛んに取り入れられている。河原に多いのでカワラナデシコともいう。別名ヤマトナデシコは、戦時中日本女性の美称として広く使われたことがあるが、今は空しくなってしまった。古くはトコナツと称した。常夏である。

萩

鹿鳴草　鹿妻草　鹿の妻　古枝草　玉見草　庭見草　野守草
初見草　胡枝子　随軍茶　天笠花　小萩　野萩　白萩　宮城野萩

浪の間や小貝にまじる萩の塵　芭蕉

小狐の何にむせけむ小萩はら　蕪村

白萩を植ゑてさびしきこと殖やす　中村路子

紅萩に見るむらさきやそこら冷ゆ　渡辺水巴

萩の風何か急かるゝ何ならむ　水原秋桜子

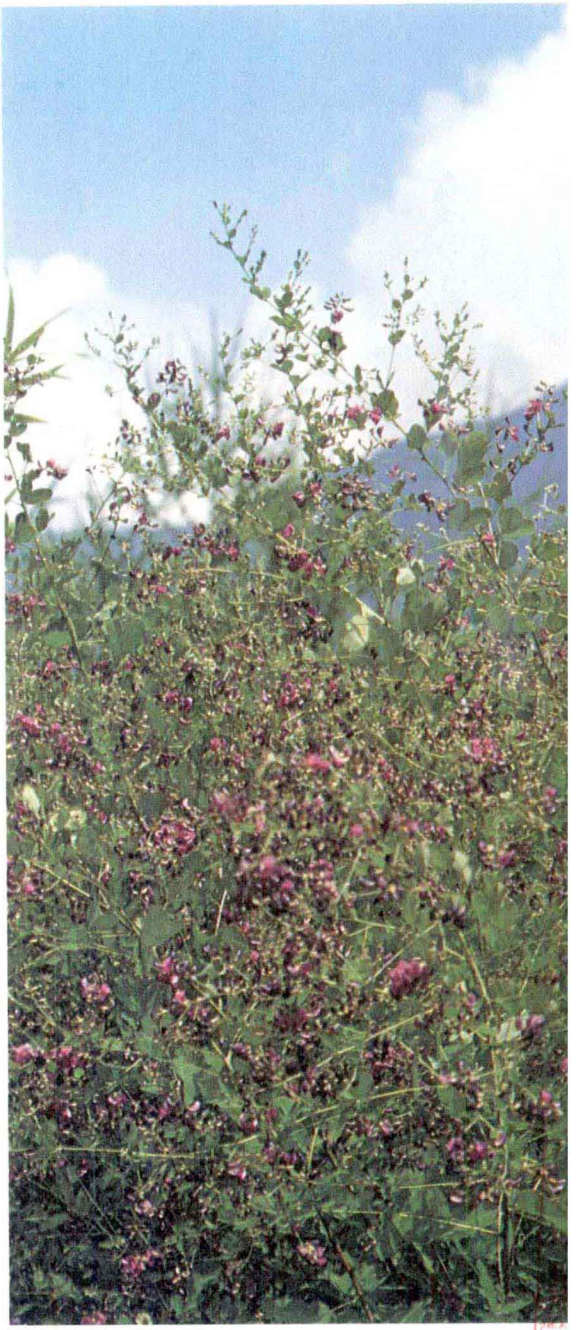
萩のひかりの綾なす腕へ注射針　原子順

萩ゆれてもんぺの僧の帰り来し　坂本孝子

山仕舞ひたる白萩に月夜かな　福田甲子雄

〔ハギ〕

ハギは秋の七草の歌の筆頭に数えられ、草冠に秋と書いて萩という日本製の漢字さえできたほどで、秋草の王とされている。ただ漢名でいう萩とは関係がない。ハギとは一つの種類の名か、それとも同類の総称か、よく話題になるが、その大衆性から考えても全国の山野にあまねく野生しているヤマハギだとみるのが妥当である。草冠ではあるが、ヤマハギは他のハギ同様、マメ科の低木である。別にまた、ヤマハギ一種に限定せず、日本に産する野生、栽培の両方の種類十数種を全部総合してハギと称する考え方もある。特に俳句などではこの後の方の場合が多いだろう。実際問題として俳句では種類のいかんを問わず、すべてを萩としてよんでさしつかえあるまい。マルバハギ（ミヤマハギ）、ツクシハギ、ニシキハギ、ミヤギノハギ、キハギなどは萩の仲間だが、ハギと名がついても、イヌハギ、ネコハギ、メドハギ、ヌスビトハギ、ヒメハギ、ヒトツバハギなどは萩ではない。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com